

しとおもふことも、すぎてはあしきこと、なるぞおほかる。胡盧山といへるから人の酒飲微酔、花看半開といひしは、げにさることぞかし。

〔今川大雙紙下〕酒に付て式法の事

一梅の花の盃をのむ様、左の方よりのみ初めて、下を中なる盞に入れて、其盞を本の所に置て、皆順にのむべし、さて後は中成を呑む也、みつ星も左より呑なり、

一主人貴人などの御前にて、中のみをせよと仰候時は、罷出て片膝を立て出て、いたゝかずして左の手をつきて、右の手にて盃を執て吞てしざる也、相構て少も下をせざる物也、略○中

一あふむ返しの盞の事、是は七返まではすべし、八返はせず、但れうじに指べからず、總じて我がぬしにあらずんば、斟酌すべき也、

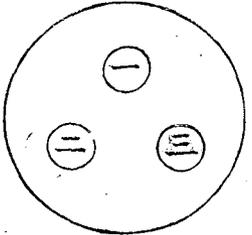
〔宗五大草紙上〕大酒の時の事 同殿中一獻の事

一公私共に召出に參る人の身體、酒のみやう以下、にこゝとなきは悪よし、金仙寺貞○伊勢いとも被申候て、若き人には稽古させられ候し、略○中

一盃の臺にすはりたる盃の事、貴人の御盃ならば、いくつもあれ一ツ、戴きてのむべし、臺ともに戴くと申人候へ共、それはわるきよし、金仙寺の給ひ候ひし、略○中

一三。ば。し。五。ば。し。のみやう如此といふ、但金仙寺にも、故勢州にも尋候はず候、

前



書付のごとく
のむべし

同前

